最優秀賞

日々を、いきる

さいたま市立大宮国際中等教育学校３年　　宮本 百花

小学校五年生の頃、家が半焼した。

幸い、留守の間に起こった火事だったので人的被害は出なかった。家も賃貸だったし、重要なものも無事だったので、特段大きな被害を受けることもなかった。けれども私はこの出来事が、私を大きく変えたと思っている。

火事が起こった時、私は近所にある祖母の家にいた。母から電話でその話を聞いたとき、私は不安や驚愕で軽いパニック状態になってしまったのを覚えている。今まで当たり前だと思っていた日常が、一瞬にして崩れ去ってしまったような気がした。

慌てる私に気を利かせた伯父は、私を近くの職場に連れていってくれた。そこで、職場の方々にかかりっきりで慰めてもらったのを今でも思い出す。彼らのおかげで、私はあの火事から立ち直ることができたのだ。

この火事に大きく狼狽えたのは私だけで、今でもあの時の私の様子は家族の笑い種だ。

けれどもあの経験は私にとって衝撃的なものであったし、あの時の貰った言葉や行為の一つ一つは今でも私の励みになっている。

私はこのとき、当たり前のことなど無いのだということを、本当の意味で知った。そして何かが起こった時、周囲の力がいかに大きいのかということを、身をもって理解した。

この時の思いは、時を待たずに、思いがけない形で再認識させられることになった。

数か月後、教育実習の先生がクラスにやって来た。その人はオドオドとした背の高い女性で、長い前髪で目元がよく見えなかった。

正直、彼女はクラスからあまり歓迎されていなかったと思う。失礼を承知で当時の率直な感想を書くと、どこか不気味で近寄りがたい人、といった様子だった。

他のクラスでは大学生たちがいつも質問攻めにあっていたのに対して、彼女は私たちから敬遠されていた。だから、彼女の出身も、大学も、声ですら知っている人は居なかった。

その日、何かの授業で私たちはＰＣ室に来ていた。事の詳細は覚えていない。ただ、どのような流れであったか、担任が彼女に、何かについて話すように促していた。

皆はあまり気にしていなかったようだが、画面をいじるのに飽きていた私は、彼女の様子を横目でこっそりと伺っていた。彼女は何かに臆するような、悩むような素振りをしていたが、やがて決心したような顔になると担任に何かを伝えた。初めてしっかりと確認した彼女の顔は、たどたどしさの中に芯の強さがあるように思われた。

担任に言われ、私たちは全員、ホワイトボードの前に立つ彼女に注目した。出身校のＰＣ室は常にカーテンが閉

め切られ、薄暗かった。特にホワイトボードの前は一段と暗く、彼女の顔もよく見えなかった。

ぼそぼそとした細い声で彼女は話し出した。

彼女は宮城県の沿岸の街出身なのだそうだ。だから、例の日は学校におり、クラスメイト全員と共に被災した。彼女の学校の教員は最初、事態の緊急性に気が付くことができなかったらしい。高台への避難が遅れ、直接津波の被害にあったのだと彼女は語った。

彼女の親友は、津波に攫われてしまった。彼女自身も、命こそ助かったものの、大きな傷が残ってしまった。

重苦しい雰囲気があたりを包んでいた。ふと、彼女はおもむろに前髪をあげた。私を含め、何人かが息をのむ音が聞こえた。

先ほど横目で窺っていたときには気づかなかった。彼女の左目は、澄んだ青空のような色をしていた。決してこちらを向くことのないその目を、彼女は義眼だと説明してくれた。

その後、彼女は私たちの質問に対して多くのことを語ってくれた。今考えると、震災について質問攻めにするのは不躾で、残酷なことだったように思える。しかし彼女は誠意をもって、私たちに震災の恐ろしさを事細かに伝えてくれた。そして、この話を子供たちに伝えるために教師を目指したのだ、と左右で色の違う瞳でほほ笑んだ。

様々な話の中で最も印象に残ったものが、彼女がどうやって震災から立ち直ったかであった。避難所に来てくれたボランティアの人や、仲の良かった近所の人々。同じような境遇にあるのにも関わらず、励ましあい、支えあったからこそ今の自分がある、と彼女は語ってくれた。「同じだ。」と、火事にあったばかりの私は強く思った。

最後に、日々を大切に生きてほしい、誰かに優しくできる人になってほしい、という言葉で彼女は話を締めくくった。その言葉は、その日の中で一番、私の心にぴったりとはまった。薄暗い教室の中、彼女の瞳が明るく、鮮やかに見えた。

残念なことに、その日が教育実習の最終日で、それ以降彼女と会うことはなかった。

けれども「日々を大切に生きること」「誰かにやさしくすること」の二つの言葉は常に胸に刻まれて、私は今日を生きている。